

1. 青森の子どもたちが手がけた大迫力の作品が続々登場！

「版画県」青森。1950～90年代の本県では小中学校での版画の取り組み－「教育版画」が盛んだったことが知られています。本展ではそのような作品の中から八戸市立湊中学校養護学級の生徒たちが共同で制作し、宮崎駿監督の映画『魔女の宅急便』（1989）の劇中画のモデルとなった《天馬と牛と鳥が夜空をかけていく》を含む『虹の上をとぶ船 総集編Ⅰ・Ⅱ』全8作品（1975-76/ 各 90×180cm）や車力村（現つがる市）300年の歴史を土地の起源と村の成立、開拓や農業の営みをとおしてふりかえる30m（！）の大傑作版画絵巻《車力農業史》（1973）等々、大迫力かつ見ごたえのある作品を続々ご紹介しします。



2. かつての・いまの子どもたちの平和への祈りが、ここに

「ぼくの兄さんは／へいたいについて／まだかえらない」（出典：鈴木喜代春編『みつばちの子』1951）。1950年代の子どもたちの作画文集をひらくと、そこには生活の苦しさや戦争反対を訴える声が散見されることに気づきます。なぜ私の暮らしは貧しいのか。父も兄も、兵隊にとられたからだ。戦争はよくない！ 一家の大黒柱を戦争にとられた彼女らにとって、生活を見つめること平和を訴えることは地続きの関係にあります。墨塗り教科書を起点とし、戦後の子どもたちが平和への祈りを込め、地域での生活や史実をつぶさにみつめながら制作した作品を紹介する本展は、戦後80年を過ぎてなお世界中で起きる戦争を私たち一人ひとりが我がこととして見つめ、自分なりに向きあうための視座を提示するものでもあります。



3. 版画家・教育者の大田耕士と青森のつながり

地方での教育版画の取り組みを戦後「日本教育版画協会」や協会主催の全国コンクールでの顕彰などをとおして支えたのが版画家・教育者である大田耕士です（先述の宮崎駿氏の義父にあたります）。大田が戦前から版画家・今純三や文筆家・菊岡久利といった本県ゆかりのアーティストと交流があったことは意外と知られていません。本展では大田が影響を受けた版画家の作品や自身が戦前に取り組んだ漫画雑誌『カリカレ』の仕事、菊岡との共作による新聞漫画連載『ボクらの戦争』等を取り上げ、作品を通じて見えてくる大田の平和にかけた思いをよみがえらせるとともに、戦後の教育版画にあたえた影響を考察します。



④



⑤



⑥

4. アーティストも子どもたちも、彫る・刷る・つくる！

青森の教育版画は当時から教育関係者を中心に注目されていましたが、今を生きるアーティストや子どもたちもその活動や作品に触発され続けています。本展では教育版画における「共同性」を大切にしながら抵抗のアクションとしての版画を手がけるアート・コレクティブ「A3BC」の作品、現在開催中のアーティゾン美術館での展示が話題であり来年は当館での個展を控える志賀理江子らによる反戦反核のための版画、アメリカ・メイン州の子どもたちの版画や東北朝鮮初中級学校で創立 60 周年の今年取り組まれている版画制作を中心とした展開をとおして、国と地域を越えた平和交流の実践の様子を紹介します。



⑦



⑧



⑨